

子どものよりよい育ちをともに考える  
ベネッセの情報誌

# これからの幼児教育

これからの幼児教育

2014

秋

2014年10月8日発行

発行人 谷山和成

編集人 小泉和義

発行所 株式会社ベネッセホールディングス  
ベネッセ教育総合研究所

©Benesse Holdings, Inc. 2014

表紙／裏表紙

東京都 ●  
月島幼稚園

## 『これからの幼児教育』刊行に寄せて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

次号(春号)は2015年2月上旬～中旬発刊(予定)です。

第1  
特集

## 保育の質を高める 遊びの「理解」と「援助」

聖心女子大学文学部教育学科教授 **河邊貴子**／明治学院大学特命教授 **赤石元子**／  
認定こども園あかみ幼稚園園長 **中山昌樹**

第2  
特集

## 「保育の専門性」を生かした 保護者支援

特別  
企画

## ワークショップ型の園内研修で 同僚性を育む

園内研修で  
活用できる  
事例つき

園内で  
回覧 してください

## 2 第1特集

# 保育の質を高める 遊びの「理解」と「援助」

### 2 座談会

子どもの関心や思いを十分に「理解」して  
遊びの質を高める「援助」につなげるには

聖心女子大学文学部教育学科教授 **河邊貴子**

明治学院大学特命教授 **赤石元子**

認定こども園あかみ幼稚園園長 **中山昌樹**



### 8 ケーススタディ

遊びの理解と援助のあり方を  
具体的な子どもの姿を通して学ぶ

### 13 遊びの理解と援助にまつわるQ&A

## 14 第2特集

# 「保育の専門性」を生かした保護者支援

### 14 インタビュー

保護者を受容し、子どもとの  
関係づくりを支援する

関西学院大学教育学部教授 **橋本真紀**



### 18 ケーススタディ

## 20 特別企画

# ワークショップ型の園内研修で同僚性を育む

## 24 Reader's Voice / 編集後記

「これからの幼児教育」ウェブサイトでは  
全ての記事を無料でダウンロードできます

◎過去1年間の特集テーマ

2014年 夏号 幼児教育に求められる「遊びの質」とは何か

2014年 春号 集団の中で「主体性」を育むために園ができること

2013年 秋号 園の保育観を入園前の保護者にもわかりやすく伝えるには？

※本誌は最新号、バックナンバー等の追加発送は行っておりません。



<http://berd.benesse.jp/magazine/en/latest/> または  で

※ここでご紹介した内容、デザインなどは変更になる場合があります。



はじめに

運動会などの行事をきっかけに、子どもたちの成長が一段と感じられる頃ではないでしょうか。その育ちを支援するために、環境構成や援助をいっそう工夫されているのではないかと思います。

前号の特集「遊びの質」は、保育の質の根本を改めて見直すという点で、先生がたよりご好評をいただきました。

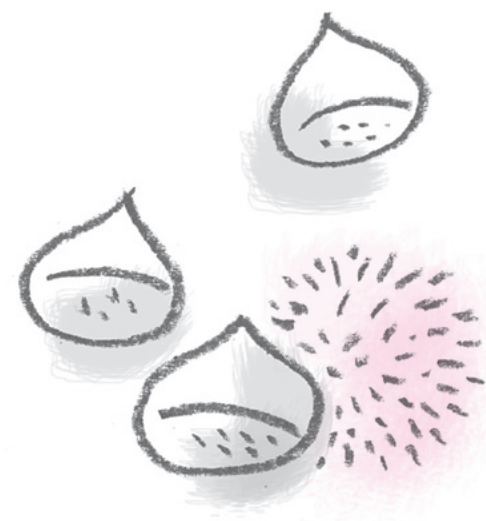
その一方で、日々の保育の中、遊び場面での「理解と援助」が難しく、具体的な実践方法を知りたいという声も多数寄せられました。

今号の第1特集では、「遊びの質」を高めるための「理解と援助」の具体的な方法について、専門家や現場の園長先生の座談会と2つの事例を通して、考えていきます。

また、近年、地域のつながりの希薄さや保護者の孤立化など、家庭を取り巻く環境が変化している中で、園の役割として保護者支援を通じた家庭の教育力・養育力向上が期待されています。第2特集では、保育の専門性を生かした保護者支援のあり方を探ります。

子どもたちがますます育つ今だからこそ、小誌で園の活動を今一度見直すきっかけにいただければ幸いです。

『これからの幼児教育』編集長 橋村美穂子





# 保育の質を高める 遊びの「理解」と「援助」

園における遊びの質は、保育の質そのものと言っても過言ではないでしょう。

前号では、遊びの質を高めるために欠かせない視点を取り上げましたが、今号ではより具体的に、子どもの経験を豊かにする遊びの「理解」と「援助」のあり方を考えていきます。

## 座談会

## 子どもの関心や思いを十分に「理解」して 遊びの質を高める「援助」につなげるには

子どもの姿から、どのように関心や思いを読み取り、遊びの質を高める援助につなげていけばよいのでしょうか。聖心女子大学教授の河邊貴子先生、明治学院大学特命教授の赤石元子先生、そして現場を代表して認定こども園あかみ幼稚園園長の中山昌樹先生の3名に、実践例を交えて大切な視点を提示していただきました。

### 遊びの理解と援助の難しさ

**一人ひとりの思いを探ることに  
難しさを感じる保育者が多い**

——本日はよろしくお願いいたします。最初に遊びの理解と援助において、保育者がどのような点で難しさを感じているのかをお聞かせください。

**赤石** 以前に私が副園長を務めていた東京学芸大学附属幼稚園では、記録の活用をテーマとした研究を進めています。子どもの内面を読み取ることに難しさを感じる保育者が多いと感じています。

記録は遊びに重点を置いて、【A】**幼児の経験している内容**（遊びの内容や子どもの関心、思い・育ち）、【B】**必要な経験**（今後の発達に必要な経験、ねらい）、【C】**具体的な援助としての環境の構成・再構成**（【B】

を実現するための環境や援助）、という3つの要素を相互に関連させて書いています（7ページ表1参照）。子どもが誰と一緒に何をして遊んでいるのかは容易にわかりますが、一人ひとりがどこにおもしろさを感じているかを見取るのが難しいようでした。例えば、みんなが楽しくまごごとをしている場面でも、何かを作ることに夢中の子どももいれば、「お母さん役」という役割に満足したり、誰かのそばにいただけで安心したりしている子どももいます。そうした一人ひとりの内面を読み取れなければ、【A】の内容は十分に深まらず、【B】【C】につなげられません。

**中山** 私の園でも、次の保育に生かすことをねらいとして、赤石先生が示されたものと同じ3つのポイントの記録に取り組んでいます。しか



聖心女子大学教授  
**河邊貴子**  
かわべ・たかこ

し、特に若手の保育者は、自身に遊びの経験が少ないからか、遊びのおもしろさを実感的に読み取れないことが多いようです。さらに保育者としての経験が浅いため、援助の手立ての引き出しも不足しています。



明治学院大学特命教授  
**赤石元子**  
あかいし・もとこ

理解と援助は一体の関係にあり、理解が不十分だと援助は生まれません。そこをうまく連動させられないようです。

**河邊** 【A】を記録する前に、前提として子どもの様子や言動などの事実の正確な把握が欠かせないと思います。例えば、ある園で子どものグループがサッカーのPK合戦遊びをしていました。保育者はあまり盛り上がっていないと感じて、振り返りでは「つまらなさそうにしていた」と記録しました。しかし、丁寧に言動を見取ると、「成功したから3歩下がろうよ」など、子どもなりに課題を設定する姿が見られていました。また、ボールが柔らかすぎでうまく転がらなかったため、保育者がボールを交換しましたが、次はかたすぎて蹴ることができない子どもがいました。これは子どもの体の発達を的確にとらえられていなかったことが要因と言えます。こうした事実を見落とさなければ、子どもの関心や思いを深く読み取っ

て次の展開を予測し、異なる援助ができたかもしれません。

**赤石** ベテランに見られるのは、経験に照らして「こうすれば、こうなるだろう」といった見通しをもてるゆえに、子どもの見取りが十分でないまま自分が進めたい方向に誘導する傾向があることです。

子どもの興味を的確にとらえ、育ちの方向を見据えて、適切な援助を考えることは、若手にもベテランにも容易なことではありません。経験豊富な保育者は感覚的にできていることもあります。が、「あの人だからできる」というように考えず、判断の根拠をきちんと共有し、話し合える関係性が理想だと思います。

### 客観的な読み取りだけでなく 実感的な理解も大切

——**全体の動きを把握することに手一杯で、一人ひとりの興味や思いを読み取れないという課題も聞かれます。**

**河邊** 子どもが遊びに集中できる環境が整っていないと、一人ひとりの見取りが難しくなります。バラバラに遊んでいる子どもを一人ひとり見取るのは至難のわざですが、落ち着ける場所があって群れになって遊んでいると、集団の中の個々の姿がよく見えます。

**中山** 小川博久先生が提唱されている「納豆理論」というものがあります。バラバラに転がる30個の大豆を追うのは困難ですが、ネバネバとくっついた納豆なら、いくつかの固まりになるので、すべての大豆の状態がわかりやすくなります。

**河邊** 「皿回し理論」というのも聞

いたことがあります。お皿が勢いよく回っているときには回す必要がありませんよね。それと同じで、よく遊んでいるところには積極的に関わらず、勢いが衰えてきていることがわかった場合、何らかの形で遊びの勢いが増すような働きかけをするという理論です。

——**保育者自身に遊びの経験が不足しているという指摘もありましたが、これはどうカバーすればよいでしょうか。**

**中山** 遠回りに見えますが、子どもの一つひとつの体験の意味をしっかりと考えるべきだと思います。遊びのおもしろさをひと言で表すならば、「心の振り子」と言えると思っています。例えば鬼ごっこでつかまりそうになると、ドキドキして心の振り子が振れる。逃げられる範囲を狭めると、さらにスリルが高まってより大きく振れる。遊びによって、いろいろな振れ方があります。今、心の振り子がどのように振れているかを、言葉に表すように心がけると



認定こども園  
あかみ幼稚園園長  
**中山昌樹**  
なかやま・まさき



いいと思います。

**赤石** 保育者自身が遊びに対して気持ちを開くと、自分の心の振り子も振れるはず。遊びを【A】【B】【C】の視点から客観的に見るだけではなく、「おもしろい」「すごい」「不思議だ」といった主観的な気持ちや気づきなど、保育者自身の心の振り子の振れを書き残すことから始めてはいかがでしょうか。

**河邊** 保育の現場にいと、どうしても「願い」が先に立つのが保育者のさです。ですから研修を通し、遊びの読み取りの練習をするのもいいでしょう。先入観をもたないように、写真で遊びの場面を見て、子どもがどう感じているかを話し合う研修も効果的だと思います。

**中山** うちの園では、野外で遊びを体験する研修を行っています。遊びの経験が少ない保育者にとっては、実感的に理解するよい経験になって

いるようです。

#### なぜ遊びの理解と援助が必要か

### 生涯にわたり学ぶ力の土台が遊びを通して形成される

——遊びの理解と援助の難しさについてはよくわかりました。園全体に実践を広げるためには、すべての保育者が考えを共有する必要があります。そこで遊びの理解と援助が必要な理由を改めて整理していただけますか。

**河邊** 理解と援助を通して遊びの質を高めることが重要なのは、生涯にわたって自ら学ぶ力の土台が、まさにこの時期の遊びを通して育つからです。同じことを繰り返すうちに遊びはつまらなくなりますので、新しい要素を取り込む必要がありますが、それは子どもだけでは難しい場合があります。そんなときに、子どもの思いや関心に基づいて、「こん

な考え方や方法があるよ」と提案することが、保育者の極めて重要な役割です。保育者の考え方や環境構成によって、まったく異なる遊びが生み出されます。

**中山** 昭和の時代には、家庭や地域に子どもの集団があり、年上の子どもの遊びをまねたり、大人の仕事に憧れたりすることで、放っておいても遊びが生まれました。環境が変わり、今の子どもは自分から遊べなくなったと感じます。園でも、遊びが見つからずじろろとさまよう子どもに、遊びに向かえるような援助が必要と考えています。

**河邊** 援助の概念は広く、直接的に手助けするだけではなく、見守ったり、季節に応じて掲示物を変えたり、さまざまな方法が考えられます。「種まき」として、絵本を読んだり、本物に出合う機会をつくったりして、遊びの芽が生まれたら、援助によっ

て質を高めていくことが欠かせません。

**中山** 子どもが砂場でカップを使って型抜きをしているとしましょう。この場面で、心の振り子がどう振れているかを考えると、砂の型抜きは常に成功するわけではありませんから、「うまく抜けるかな?」「もっときれいに抜きたい」といったドキドキした気持ちに動かされていると理解できます。そして、この理解に基づくと、「もっときれいに抜けるように、砂の状態をこうしておこう」など、子どもがより充実感を味わえるような援助が考えられます。このように、子どものふだんの活動ひとつとっても、保育者の理解と援助の大切さがわかります。

#### 遊びの理解と援助の具体的なあり方

### モノ・コト・ヒトとの関わりに着目して遊びの見通しをもつ

——次に、具体的な理解や援助のあり方をお聞かせください。河邊先生や赤石先生は、日頃、多くの園の保育を見学されていますが、その際、どのような点に着目しているのでしょうか。

**河邊** 子どもの遊びは、モノとコト、及びヒトとの関わりから生み出されるため、これらの要素がどう絡んでいるかを見ながら遊びの意味を読み取ります。より詳しく言うと、モノ・コトについては「向き合う対象（モノ・コト）の性質や状態をどのように理解したか」「遊びの展開に即して必要なモノやコトや場にどのようにアプローチをしているか」、一方、ヒトについては「友だちや保育者の動きを見たり言葉を聞いたりしてい



るか」「自分の思いや考えをどのように伝えているか（表情、多様な表現、態度、言葉など）」といった視点を重視しています（4ページ図1参照）。

遊びが変化するときは、モノ・コトやヒトとの関わりから生じるきっかけが必ずあります。このきっかけをしっかりとキャッチすると、子どもの関心や思いが見えやすくなります。遊びは新しい要素を取り込まないと、次第に停滞しますので、そういうときはモノやコトとの関わりか、ヒトとの関わりに対する援助が必要になります。

**赤石** 集中して遊んでいる子どもにも注目しますが、うまく遊べない子どもが発するメッセージにも注意しています。例えば、一生懸命に作ったモノを「これ、あげる」と渡されたとしたら、「どうして簡単に人にあげてしまうのか」「保育者との関わりに課題はなかったか」などと、背景にある思いや事情に考えをめぐらせます。

遊びは自己決定によってつくることが重要ですから、子どもが明確な目的意識をもって遊びをつくり変えているかにも注意を払います。

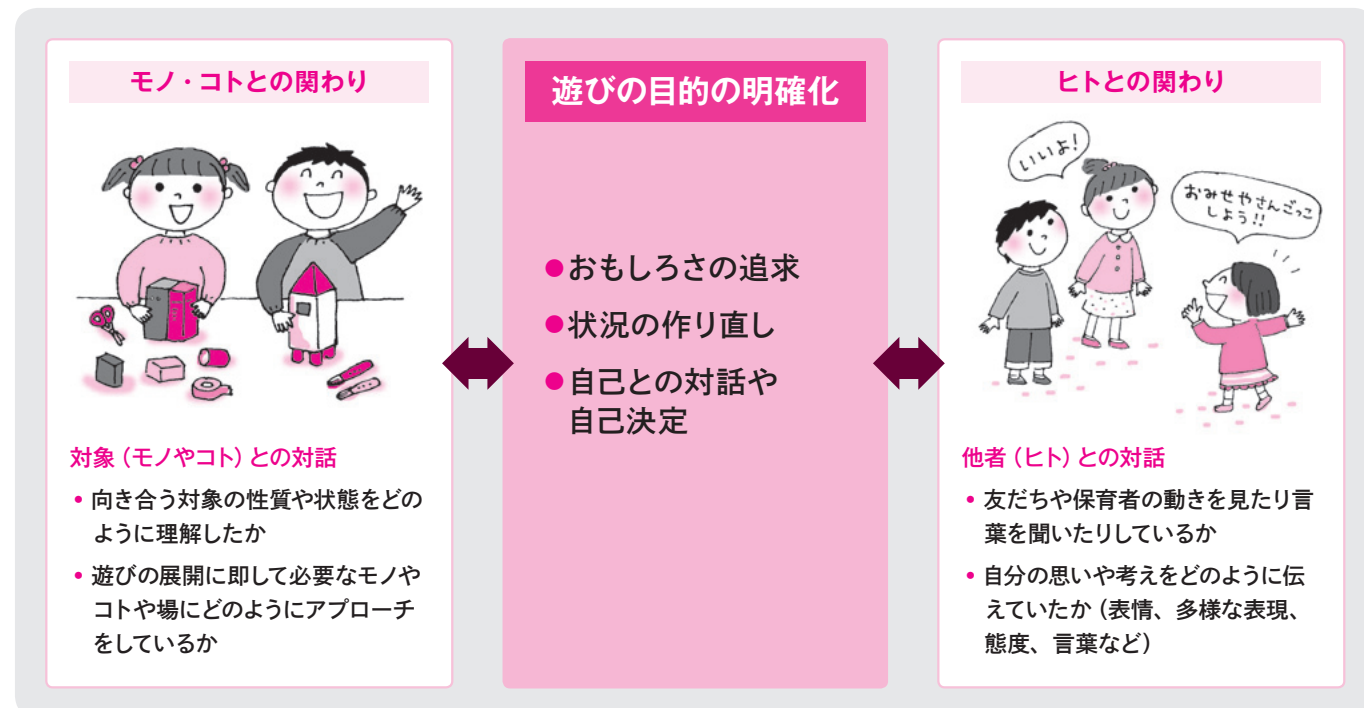
一斉活動においても自分の課題として受け止め、「やってみよう」「おもしろい」といった思いに動かされているかを見取っています。

**河邊** 理解から援助につながる流れは、【A】【B】【C】の流れに沿うとわかりやすいです（7ページ表1）。ある3歳6カ月の男の子が工作でロケットを作ると、あっという間に他の子どももまねし始めました。この場面の【A】は、「友だちが始めたことへの関心が高まっている」「友だちと同じことをしたり、同じものを持ったりするのが楽しいようだ」「やりたい気持ちはあるが、行動したり、言葉にできなかったりする子どももいる」といった理解が想定されます。これに基づき、【B】は「友だちとつながりながらイメージを共有する経験をする」と設定し、【C】の援助としては、子どもの意欲を高めるアイテムを提示するなどの方法が考えられます。

### 自由にモノを作れる環境が持続的な遊びを生み出す

——例えば、なかなか遊びが続かない場面では、どのような援助が考えられますか。

図1 遊びの意味を読み取る視点





**中山** 初めは漠然としている遊びの目的は、遊びの中で次第に明確になります。それに伴い、もっとおもしろい遊びにするためには足りないモノやコトがあることに気づきます。それを作って遊びを深め、また足りないものに気づく…というプロセスの連続です。そこで遊びを持続させるためには、製作コーナーに素材や道具を常備するなど、自由にモノを作れる環境構成が大切だと考えています。

このことは、ままごとの過程を考えると、よくわかると思います。ままごとは、足りないモノを作ったり、トラブルを解決したりしながら、問題を乗り越えて、現実とのギャップを小さくしていくことが楽しさのひとつだと思います。例えば、レストランごっこで箸がないと気づいて木の棒で作ったり、お寿司屋さんなのに冷蔵庫がないと指摘されて段ボールで作ったりして、よりリアルなお店や家庭の再現を目指すわけです。こうした遊びの中でモノを用意できないと、遊びが持続しにくくなります。また年長児によく見られますが、作ることを面倒に感じて、「ここに冷蔵庫があることにしよう」などと、作らずに進めることもあります。こうした場合も遊びに飽きやすくなりますから、できるだけモノを作り

たくなるように導くといいかもしれません。

**赤石** モノを作ることに加え、ヒトとの関わりがあると、さらに遊びは持続すると思います。なかなか遊びが発展しなかったり、飽きが見られたりするときは、保育者がモノを作ってモデルになるなど、楽しそうに作っている子どもに関心が向くように促すと思います。

**中山** 保育者のひと言がスイッチになって、遊びが活性化することはよくあります。前日までレストランごっこをしていた子どもたちの近くで、保育者同士がさりげなく「今年のボジョレー・ヌーボーはどうですかね？」と話題にしました。すると、その意味がわかった子どもがボトルのようなモノを出し、レストランごっこが再び始まりました。新しい要素が遊びに加わったわけです。保育者がこの場で「昨日のレストランごっこはもうやらないの？」と言ったとしたら、子どもの気持ちは高まらなかったかもしれません。

### 保育者が子ども同士をつなぐことで遊びが広がり、深まる

——モノ・コトに関わる援助は比較的イメージしやすいのですが、ヒトとの関わりを生み出す援助は具体的にどのようにすればよいのでしょうか。

か。

**河邊** 私はふだん、保育者に対して、「伝書鳩」や「拡声器」になるといいねと、お話しすることがあります。保育者にとって子ども同士をつなぐ役割はとても大事です。あるグループの遊びを広げたいと考えたら、例えば、他の子どもの前で「あっちのアイスクリームはおいしかったな」などと、楽しそうに独り言を言えば、楽しさが伝わり、子どもの関心が向くでしょう。

保育者が仲間になって、対等に遊ぶ中で子どもをつなぐ援助もあります。例えば、探検ごっこになかなか入れない子どもがいたら、保育者が遊びに入り込んで「このリュックサックを持ったら、みんな探検仲間ね」と提案すれば、モノが媒介となって子ども同士の関わり合いが生じやすくなるでしょう。ふたりの関係を深めたい場合は、真ん中にモノを置くという方法も考えられます。

友だちとの人間関係がうまくつけれない子どももいます。グループで遊んでいるとき、その子どもの横に座って、「先生もわからないから、教えてほしいな」と、思いを代弁するような援助もいいと思いますね。

**中山** 遊びにルールを設定するのも、子どもの関わりを生み出す援助と言えると思います。ルールがあるということは、複数の子どもが一緒に守って遊ぶということです。最初は簡単なルールを設定して経験を積み重ねていくと、5歳頃には「ドロボウと警察」など、かなり複雑な遊びができるようになります。

**赤石** 子ども同士をつなぐためには保育者自身と一緒に楽しむことも大

表1 「理解」から「援助」につなぐための記録の視点

	記録の視点	具体的な内容	例 子どもたちがテラスでバードウォッチングをしている場面を想定し、考えられることを話し合ってみましょう。
姿の把握	事実の把握 (子どもの様子や言動などの事実)	<ul style="list-style-type: none"> <li>誰と誰が、どこで、何をしているのか(基本情報)</li> <li>何を使い、どのように環境に関わっているのか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>年長のA児、B児、C児が、保育室前のテラスで望遠鏡を使って野鳥の観察をしている</li> <li>順番に声をかけながらひとつの望遠鏡を使っている</li> </ul>
A	幼児の経験している内容 (そこでの子どもの関心や思い・育ち)	<ul style="list-style-type: none"> <li>何がおもしろいのだろうか(遊び課題・動機)</li> <li>どんな経験をしているのだろうか</li> <li>何が育っていると考えられるだろうか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>望遠鏡をのぞけるのはひとりだけだが、みんなが同じ方向を見ている</li> <li>ひとつの出来事や発見をともに喜び、同じ方向に関心を向ける姿がある</li> <li>共感性が高まっている</li> </ul>
B	必要な経験 (ねらい・内容)	<ul style="list-style-type: none"> <li>次に必要な経験は何だろうか</li> </ul>	(考えられることを話し合ってみましょう)
C	具体的な援助としての環境の構成・再構成	<ul style="list-style-type: none"> <li>その経験が満たされる活動、環境は何か</li> <li>直接的な援助は必要だろうか</li> </ul>	(考えられることを話し合ってみましょう)

※編集部まとめ



切ですが、保育者が遊びの中心になるのは避けなくてはなりません。遊びが動き出したらサッと引いて、子どもたちがつくり出す世界を見守るといいですね。

### 現場の保育者へのメッセージ

### 子どもは思うまま遊んでいる期待通りに動かないで当然

——最後に、遊びの理解と援助の取り組みをますます深めていこうとされている現場の保育者のみなさんにメッセージをお願いいたします。

**赤石** すべての援助が必ずしもうまくいくわけではありません。保育者の提案に対し、子どもから「そんな

のつまらないよ」といった反応が返ってくることもあるでしょう。しかし、それは失敗ではなく、子どもの思いとのズレに気づいて保育を修正できるチャンスだと思います。そのためには、時間がない中で大変ですが、しっかりと記録することが大切でしょう。

**河邊** 頭でっかちになるのはよくないですし、かといって感覚だけに頼るのも避けなくてはなりません。「思考」という言葉がありますが、思いばかり大きくなると考えが小さくなって感性が狭まってしまいます。思考のバランスを大切にしてく

ださい。保育者の役割をしっかりと頭で考えることは必要ですが、それだけでは保育がギクシャクしてしまいます。保育の流れの中では、瞬間的に判断しながら動き、あとからきちんと振り返ることが大切ではないでしょうか。

**中山** 子どもは「思うままに遊んでいる」ということを忘れてはいけません。保育者の期待通りに動かなくて当然なのです。そういう意識から、保育のあり方を考えていくといいと思います。

——本日は貴重なお話をいただき、誠にありがとうございました。





## ケーススタディ

# 遊びの理解と援助のあり方を 具体的な子どもの姿を通して学ぶ

保育者が個々に取り組むよりも、園内研修を通して園全体でレベルアップを図る方が効果的です。  
ここでは、ふたつのケースを基に、遊びの理解と援助の具体的なあり方を考えていきます。  
ぜひ園内研修でご活用ください。

## 園内研修の考え方

### ◎個人ではなく、園全体で取り組みましょう

保育者のレベルアップを図りたいときは、個人で取り組むより、園全体で共有しながら実践を深めていく方が効果的です。さまざまな意見を交わし合う中で視点が広がりますし、同じ目標に向かう仲間と学び合う関係ができるので、気持ちの面でも大きな利点があります。

### ◎結論を出すことが目的ではありません

保育者が意見を交わし合う中で考えを深めていく過程を大切にしましょう。遊びの理解や援助にひとつの答えはありませんから、必ずしも結論を出す必要はありません。意見のよし悪しではなく、違いに着目して話し合いを深めてください。



## 園内研修の流れ

- ステップ1** 事例を読んで考えたことや感じたことを書き留めましょう。付箋紙に書くと、その後の意見交流がスムーズになるでしょう。
- ステップ2** それぞれが整理したことを発表して共有しましょう。意見を整理する際は、「理解」と「援助」に分類すると分かりやすくなります。
- ステップ3** ファシリテーターが中心になって話し合いを進めます。あらかじめ記入した付箋紙をもとに説明すると、若手の保育者も話しやすいでしょう。
- ステップ4** 話し合いで得られた気づきや考えを、翌日からの保育にどう生かすかを考えます。今後の目標などを発表し合う場を設けてもよいでしょう。

## 考え方のPOINT

- ◎子どもの姿から、「どのような関心や思いが読み取れるか」、そして「理解に基づいて、どのような援助が考えられるか」という視点をもつととらえやすくなるでしょう。
- ◎遊びは、「モノ・コト」、および「ヒト」との関わりを通して広がったり深まったりします。どのような関わりが、遊びが変化するきっかけになっているかに着目しましょう。

## ケース1

## 少人数の ごっこ遊びを全体に広げたら…

### 場面1 4人が力を合わせてレストランごっこを開始！



運動会が終わり、園生活に穏やかさが戻ったある日のことです。子どもたちの遊びが停滞していると感じた5歳児の担任は、トイレットペーパーにのりを加えて粘土状にして、絵の具で色づけしたものをハンバーグやおにぎりに見立て、料理サンプルとして保育室に置きました。それに興味をもった女児4人が「私たちも作りたい」と言いました。担任は、作業の大変さを伝えましたが、4人が「大丈夫」「やってみたい」と答えたため、作り方を教えました。

4人は黙々と時間をかけて、力を合わせてひき肉やケチャップライスを作ると、ひと息ついて、それぞれが次に作りたいものを言い始めました。それが仲間を受け入れられると、ハンバーグやオムライスなどを作って紙皿に盛りつけ、レストランごっこを始めました。

### 場面2 保育者が他の子どもたちにつなげたが…



担任は、提示した環境によって遊びが広がったと感じ、帰りの時間に子どもたちに報告しました。すると、数人の子どもの「仲間に入りたい」と言って、4人に受け入れられました。新たに仲間に入った子やまわりの子どもたちは、「メニューが必要だね」「レジ係がいる。私がやってあげてもいいよ」など、さまざまな提案をしました。担任は4人に向かって、「みんながいろいろなアイデアを出してくれてよかったね」と話し、「明日は一緒にやりたい人がそれぞれの役をすれば、もっと楽しくなるね」と、帰りの時間を締めくくりました。

翌日は、新しく仲間に入った子どもたちが張り切って活動し、レストランごっこがにぎやかに展開しました。最初の4人は、お客係から注文の内容を聞いて、料理を作っていました。遊びが一段落して片付けが済み、担任が「みんなで力を合わせたレストランごっこ、どうだった？」と尋ねると、あとから加わった子どもたちは、「楽しかった」などと口々に言いましたが、最初の4人は何か言いたそうな表情で、黙って担任の顔を見つめていました。

ケース1  
解説誰が始めた遊びなのか、  
明確に意識して十分な配慮を遊びの主役は誰なのか  
意識されていなかった

**中山** 料理に見立てたものを見て、自分で作りたい気持ちが起ってレストランごっこを展開する流れは、5歳児ならではのよいなと思いました。

**赤石** 保育者が手間をかけて用意したおかげで、遊びの目的がどんどん深化していく姿が見て取れます。

**河邊** 運動会が終わった行事の谷間の時期で、夢中になれる遊びがなかなか見つからなかったから、みんなが参加したかったのしょうね。保育者も、活動が広がってみんなで遊んでほしかったのだと思います。

**中山** 私が気になったのは、保育者が遊びの主役は誰なのかをあまり意識していないことです。遊びの援助においては、誰に遊びのイニシアチブがあるかを明確にすることはひとつのポイントだと思います。最初に

遊びを始めた子どもは遊びの「生みの苦しみ」を体験していますから、やはり尊重するべきでしょう。

この事例では、保育者がイニシアチブを明確にしなかったため、結果的に遊びが他の子どもに「乗っ取られた」ような形になってしまいました。特に、あとから加わる子どもの方が活発な場合には、保育者は十分に配慮すべきだと思います。

**赤石** 保育者の最後の言葉だけを聞くと、目的を共有し、協力して作業を進める経験ができたように思えます。ただ、4人の表情からわかるように、子どもたちの思いとズレが生じてしまいましたから、最終的には成功とは言い難い状況だったと言えるでしょう。

仲間に加えるタイミングや  
入り方は見直す必要も

**河邊** 子ども同士を関わらせ、遊びを広げようとしたこと自体はよいと

思います。特にお店ごっこは、お客さんが訪れることで、目的がより明確になって充実しますので。ところが、あとから加わる子どもが、お客さんではなく、仲間として内側に入ったことが問題だと感じました。帰りの会の報告では、例えば、4人に向かって「明日もレストランをやりませんか？先生は行きたいな」「お金を持っていった方がいいですか？」といったふうに外側から関わり、お客さんを増やすような誘い方をするとよかったと思います。

一部の遊びを全体に紹介されるのは、子どもにとって誇らしいことですし、紹介し合いながら遊びは広がっていくものだと思います。しかし、紹介するときは、きちんと紹介する意味を考えたいものです。例えば、「目立たないけど、すごくよい遊びだからみんなに知らせよう」「全体の遊びが停滞しているから刺激を与えよう」などが考えられます。

**赤石** 全体に対して報告するタイミングが早かったかな、という気もします。もう少し見守っていれば、4人はレストランの中で役割を分担し、「こんなレストランにしよう」といった方向性がより表れたでしょう。保育者がそれまでの経験から、「お店ごっこはこう展開するだろう」といった「型」のような考えをもち、先回りして全体に広げてしまったのかなという気もしました。本来は、もっとと自然に展開していくのが理想的だと思います。



## ケース2

担任に相談すると  
次々に解決したのだけれど…

## 場面1 次々生まれる子どもの疑問に担任はすぐに…



1学期末、A、B、C、D、Eの5歳児の男女5人が、前日からペットボトルを並べ、ボウリング遊びをしていました。担任は1週間後に控えた園行事「お祭りごっこ」のアトラクションのひとつとしてやってみないかと5人に提案しました。5人は喜んで同意しましたが、今の状態ではアトラクションとしては不十分なこと気づき、担任を交えてみんなで相談を始めました。

初めにAちゃんが「ピンを並べても、すぐに倒れちゃう」と言うと、担任は「倒れないようにしたいのね。じゃあ、中に何か入れるといいね」と答え、5人はピンに砂を入れることにしました。次にCくんが「ボールが大きすぎるんじゃない？」と言うと、担任は「この間、Eちゃんがまりつきしていたあのボールはどうかしら？」と提案し、そのように決まりました。



## 場面2 解決のための道具も提示して課題をクリアしたが…



その後、「何を使ってレーンを作ろうか？」というDくんの相談に対し、担任は「積み木があるし、大型ブロックもあるんじゃない？」とヒントを出しました。また、「ピンの色は、ペットボトルのままではつまらない」という意見には、ビニールテープを巻いたり、フェルトペンで塗ったりする方法を示しました。

どのように改良するかが決まると、担任は「みんなで考えたから、よい方法が決まったね。じゃあ、あとは何から始めればいいのかを決めて、みんなでできるね。よかった。楽しみだね！」と言って、他の子どものもとに行きました。5人はいろいろ話していましたが、やがてピンにビニールテープを巻き始めました。



ケース2  
解説子どもに「答え」を与えず、  
自分たちで乗り越える体験を大切にしたい試行錯誤する時間が  
育ちの保障につながる

**赤石** ボウリング遊びをお祭りですることになって目的が明確になり、次々に課題が見え始めました。これはすごくよい流れだと思います。ただし、すべての質問に保育者が即答してしまっているのは、とてももったいないと感じました。5歳の1学期末であれば、自分たちで試行錯誤するプロセスを大事にして、育ちを保障したいところです。保育者が子どもと一緒に考える姿勢を見せるのはよいのですが、具体的な方策までは出さなくてよかったのではと思います。

**中山** 保育者が一緒に悩む態度を見せたり、ヒントとなる資料を提示したりすれば、おそらく自分たちで乗り越えられたでしょう。背伸びすればできそうな課題にチャレンジするとき、子どもの心の中の振り子は大きく振れ、おもしろさを実感します。ところが、この事例は、背伸びをさせたい課題を取り除いているかのようにも見えてしまいます。

**河邊** 年度初めの出来事でしたら、成功体験をさせることを最優先し、保育者が少々「やり過ぎ」なぐらいに援助をするのもアリだと思います。また、まだ解決が技術的に難しい場合も、具体的な選択肢を見せ、作業を手伝うなど、ある程度、ガイドする必要はあるでしょう。

しかし、この時期の援助としては、



子どもの育ちの機会が得られなかったというマイナス面もあります。例えば、「ボールが大きすぎる」という子どもに対し、「本当だねえ。どれくらいがいいのかな」と返せば、みんなで話し合うきっかけになったでしょう。

遊びから行事になった？  
期限を決めることのよし悪し

**赤石** もしかしたら、本番まで1週間と日数がないため、このような過多の援助になってしまったのかもしれないですね。

**中山** それは考えられます。ただし、残り1週間という期限を設けた時点で、子どもの遊びではなく、行事になってしまいます。行事が悪いわけではありませんが、子ども主体の遊びとは別物と考えた方がよいと思います。

**赤石** 私は、遊びに期限を設けるの

は、子どもたちに緊張感をもたせるという意味で悪くないと思いますよ。期限がなければ、やはりダラダラとしがちです。

**中山** なるほど。そういう考え方もありますね。

**河邊** 一方で、あまりにも「みんなで相談してね」と、子どもに任せすぎると、せっかくボウリングをしたという強い気持ちがあるのに、なかなか遊びが展開しないことも考えられますね。

**中山** 確かに、子どもたちが「戦略なき相談」をすると、「どうしようか？」といった発言ばかりで、つまらない活動になる恐れがあります。結局のところ、子ども主体の話し合いを優先したいのか、それとも1週間後の「お祭りごっこ」を成功させることを重視したいのか、といった保育者の思いによって、援助の方法は大きく変わってくるのでしょう。

## 遊びの理解と援助にまつわる Q &amp; A

先生がたから寄せられた質問に、赤石先生と中山先生がお答えします。

**Q** 一生懸命に環境を構成したにも関わらず、子どもたちに受け入れられないことが多々あります。何が原因なのでしょう？ また、そういうときは、どうすればいいのでしょうか？

**赤石先生の回答** 環境構成には、「こういう遊びをしてほしい」といった保育者のねらいが込められています。それが子どもの心に届かないのは、興味や関心の読み取りが甘かったのかもしれませんが、そういうことは経験豊富な保育者にも、たびたび起こります。

受け入れられなかった原因を考えたいですが、これを見極めるのは容易ではありません。ひとりで解決しようとすると、考えがグルグルと堂々巡りすることが多いため、同僚に話してみることをおすすめします。

**中山先生の回答** 子どもが予想通りに動かないことをお

もしろがれる気持ちの余裕があるといいですね。同僚との間に、「今日はうまくいかなかったなあ」と愚痴を言える関係があればさらによいと思います。ときには、気軽な会話の中から、改善のヒントをもらえることもあるでしょう。

環境が受け入れられない場合は、一步踏み込んで、子どもが受け入れられるような援助を考えてみましょう。そのためには、保育者が楽しむ姿を見せるのが一番です。環境への関心は高まるでしょうし、単に環境の活用の仕方がわからなかったただけなら、まねし始めると思います。

**Q** 「子ども理解」が出発点ということはわかりますが、なかなか難しいです。子ども理解を深めるためには、日々どのようなことを心がけるといいでしょうか。

**赤石先生の回答** 私が保育者になったばかりの時期は、感覚的に保育をしていました。しかし、「それはよくない」と指導を受け、保育記録の中で文章を書くことを徹底するようになりました。そうするうちに、次第に根拠に基づいた保育ができるようになりました。

記録を通して冷静に保育を振り返るのはとても大事ですが、一方で保育の最中に感じたり思ったりしたことにもぜひ目を向けてください。「今日は、ふだんより絵本をよく聞いてくれてうれしかったな」「あのとき、子どもが

突然歌い始めたのはなぜだろう」といった思いや疑問を基に、子ども理解を進めようと努めることで深い視点が得られると思います。

**中山先生の回答** 「子ども理解」と言われますが、それ以前に「人の理解」であることを忘れてはならないと思います。発達には個人差があり、興味や関心はそれぞれ違いますから、「この時期の子どもはこうだ」とひとくくりにした子ども理解をせず、目の前のひとりの人間を理解したいという思いがベースにあるとよいと思います。

現場の  
みなさんへ

**河邊先生** 子どもはおもしろいことを考えつく「天才」です。遊びの質を高めるコツは、子どもの姿をよく見て、「感心」すること、そして保育者自身も遊びを楽しむことです。

**赤石先生** がんばりすぎず、保育の中に楽しさを見いだしてください。遊びの理解と援助は、保育中に自分の心が動いたことを出発点とすると、本質に迫りやすいと思います。

**中山先生** 遊びは保育者が子どもにやらせるのではなく、逆にほったらかしにすることでもない。容易ではありませんが、子どもの思いに根ざした理解と援助で、豊かな遊びを一緒に支えていきましょう。



# 「保育の専門性」を生かした保護者支援

社会の変化とともに地域社会や近隣から支援を受けながらの子育てが難しくなる中、  
保育者による保護者への支援がますます重要になっています。  
教育や福祉、医療など、保護者と子どもに関わることの多い専門家の中で、  
「保育者」に期待される支援とは何かを考えます。

## インタビュー

## 保護者を受容し、子どもとの関係づくりを支援する

近年、注目を集めている「保育相談支援」。  
この考え方について、保育者としての経験もある  
橋本真紀先生にうかがいました。

関西学院大学教育学部教授 **橋本真紀**

### 社会の変化によって 保護者との関係構築が困難に

「最近保護者との関係構築が難しくなった」と話す現場の先生がとて増えていると感じます。先生がたが感じているその難しさの中身をうかがうと、それは個別的な対応を必要とする家庭や、特別な配慮を必要とする家庭が増えてきたということです。

個別的な対応を必要とする家庭とは、例えば保護者が病気や仕事といった事情のために、通常よりも子どもを長く預かってほしいなど、園へのニーズを強く出さざるを得ない状況になった家庭です。また、特

別な配慮を必要とする家庭とは、例えば子どもへの虐待の疑いがある家庭、子どもや保護者に発達障害があると考えられる家庭、そして保護者がうつ病や統合失調症などの精神疾患のある家庭などです。こうした要因は、複合的に絡み合い、状況をさらに困難にしているケースも少なくありません。

このような家庭の存在が近年注目されるようになった背景には、私は社会の変化と、地域の対応力の低下があると考えています。例えば、昔はお迎えに来られなくなった家庭があっても近隣の保護者が「それじゃあ、私が代わりに〇〇ちゃんを連れて帰りましょう」などと、地域



はしもと・まき ◎専門は地域子育て支援、家庭支援。共著に『保育相談支援』（ミネルヴァ書房）、『保育者の保護者支援－保育相談支援の原理と技術－』（フレーベル館）など。

の人間関係の中で助け合うことができましたが、今はそのようなことは難しくなっています。地域で課題を吸収する力が弱くなり、その分、園がいろいろな課題に対応しなければいけなくなっているわけです。特に社会的に人との関係調整を図りにくい、特別な配慮を必要とする家庭にとっては、より顕著な問題になって表面化します。



### 保護者を 協働する仲間ととらえ直す

よく「最近、幼児教育や保育をサービスとしてとらえている保護者が少なくない」「園に対して一方的に要望だけを主張する保護者が増えた」といった声を耳にしますが、それは保護者の価値観が変わってきたからというよりも、家族や地域のあり方が変わったため、これまでも存在した個別的な対応を必要とする家庭、特別な配慮を必要とする家庭の存在が注目されやすくなったからだと考えた方がいいのではないでしょうか。

また、幼児教育や保育をめぐる社会制度自体も大きく変わりつつあります。「子ども・子育て支援法」も見方を変えれば、保護者に対して自分の望む保育や幼児教育のあり方を踏まえて、自分に合ったものを選んでもらおうという社会の意思だとも言えるかもしれません。

そうした状況だからこそ、個々の保護者を「一方的な自己主張をしないでほしい」と否定的な面だけでとらえるのではなく、「それぞれに困難を抱えながら子育てに取り組んでいる」と肯定し、協力・協働して一緒に子どもを育てていく仲間であるという意識に立つことが、今改めて

必要なのだと思います。

つまり、保護者との協力・協働的な関係を構築していくためには、それぞれの家庭の状況、課題をくみ取り、自園としてはどこまで応えることができるのかを考えることがますます重要になっていると言えるでしょう。

### 保育相談支援の援助スキルの 基盤は「保育の専門性」

個別的な対応を必要とする家庭、特別な配慮を必要とする家庭の保護者を支援しながら、親子関係や養育力の向上を目指すのが、「保育相談支援」という援助スキル（技術）です。保護者支援の中では、カウンセリングやソーシャルワークなどの専門技術が用いられる場面もあります。しかし、ベテランの保育者はきっとそうした専門技術を特別に意識することなく、これまでも保護者支援を行っていたはずです。その意味では、保育相談支援は新しいものではなく、保育者がもつ

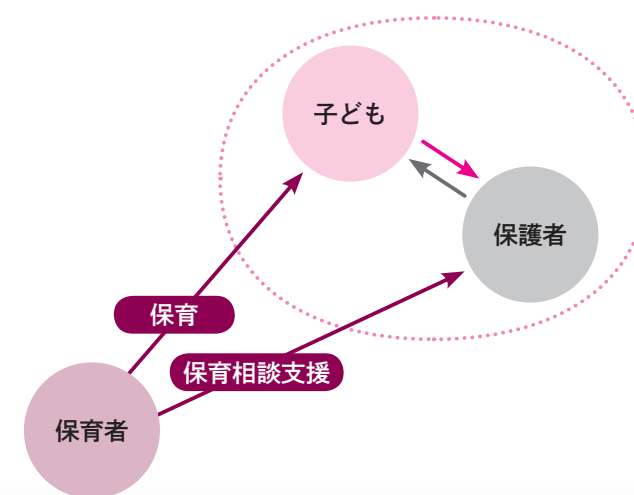
「保育の専門性」を基盤に、以前から園で行っていたものであるとも言えます。

虐待が疑われるケースがあったとき、臨床心理士やソーシャルワーカーは各々の専門技術を生かしたアプローチを行います。では、保育者はどうでしょうか。ほかの専門職以上にその親子に日常的に接してきた保育者として、問題の解決に主体的に関われる部分がきっとあるでしょう。臨床心理士やソーシャルワーカーと対等な立場で連携できるような、保育の専門性を体系化し、保護者と子どもへの関わりに生かしていくのが保育相談支援だと思います。

### 親でありたいという気持ちを 認めていく

「全ての保護者はその子の親でありたいと願っている」「全ての保護者は、親としての力をもっている」ということを保育者が信じてくことが、保育相談支援の基本です。たとえ毎日きちんとできていなくても、

図1 保護者に対して行う「保育相談支援」



保護者への保育相談支援は、親子関係により影響を与えることを目的に行われる



表1 保育相談支援の技術例と具体例

著作権の関係で表示できません。

保護者が園に子どもを送り出しているというだけで、その保護者には「親でありたい」という思いがあるはずです。園の約束事を守れないことがあるなど、保育者から見れば改めてほしいところがある保護者であっても、親でありたいという気持ちを認

め、その気持ちを支え続けることが保育者の役割だと思います。保育者のそうした態度は、保護者を通して、きっと子どもの最大の利益につながります。

もちろん、園の約束事を無視してもよいというわけではありません。

ですから、足りない部分は補い、改めるようお願いはするけれども、保護者の、親であろうとする気持ちを認める態度を貫きたいと思うのです。

例えば、お弁当を持たせないで登園させることがある保護者が、遠足

にコンビニの弁当を持たせたとき、それもその保護者なりのささやかな努力だと認めて「今日、〇〇ちゃん はみんなとおいしそうにごはんを食べていましたよ」と話しかけるのか、「コンビニ弁当を持って来させるなんて…」という目で見るのかでは、その後の保護者との関係性は大きく違ってくるでしょう。もしも保育の専門知識をもった保育者から「お母さん、がんばっていますね」と声をかけてもらえれば、親であろうと懸命になっている保護者にとって何よりの励ましになるはずです。

### 体系的な援助の技術と知識で保護者に共感する

保育相談支援において保育者は、自分がどういう関わりをすれば子どもと保護者の関係がよくなるか、子どもと保護者がふたりで葛藤を乗り越えていける関係になるかを意識しながら関わることが大切です。

保育相談支援の具体的な技術にはさまざまなものがあります(16 ページ表1 参照)。例えば、「気持ちの代弁」という技術は、子どもの思いを保護者に伝えるものです。子どもの気持ちを保育者が客観的にとらえ、保護者に伝えることで両者の関係を修正することになります。言葉がうまく使えない0～2歳児でも、子どもと時間をかけて関わっている保育者であれば、その気持ちを適切に代弁することができます。保育者の代弁を通して、保護者は子どもの気持ちのとらえ方、子どもを理解する視点のもち方がわかるようになります。

「共感・同様の体感(同感)」(16



ページ表1 参照)は、対人援助職が活用する「共感」とは異なる保育者の特性と言えます。保育者は子どもの成長に直接的に関わり、支えています。子どもの成長は保護者の喜びであると同時に、共に支えてきた保育者の喜びでもあります。子どもの成長に対する保護者と保育者の喜びの共有は、カウンセラーがクライアントの心情を理解しようとする「共感」とは異なります。同じ体験を有する者同士の「共感」を超えた「同感」です。ただし、その後の対応は、保護者の親としての立場を尊重し、子どもの育ちを支えた力を認め、保護者の自信を支える方向に転換していくことが大切です。

私は学生に「自分にとっては非常識だとしか思えない保護者の言動は、保護者の側から解釈しないと共感もできない。そのためには自分の感覚だけで保護者をとらえるのではなく、発達障害や精神疾患に関する知識が必要」と説明しています。そうしないと、彼らが保育者となった

ときに、理解が難しい保護者を前に疲弊してしまうからです。

### 援助技術を整理することでさらに保育に自信がもてる

表1で整理した保育相談支援の技術は、ベテランの先生がたにとってはふだんから取り組んでいる、当たり前のものばかりかもしれません。

ただ、こうして技術を整理したのを見ながら現場の先生がたと話すと、「私たちが特に意識せずに保護者に対して行ってきた働きかけの中には、これだけ多様な技術が盛り込まれていたのですね」と驚き、「保育の専門性の豊かさに自信を深められた」ということがよくあります。また、「これまで保護者に対しての助言だと思っていた自分の働きかけは、むしろ『解説』と呼べるものでした」と気づきを得る先生もいます。

実践を通して培った多彩な技術を整理すれば、若手保育者とともに日々の保育を振り返るときにきっと役に立つはずです。

### 現場のみなさんへ

◎高齢者福祉の領域では、問題を家族と施設だけで抱えるのではなく、地域の中で対応していこうという動きが始まっています。私は、保育の領域でもそうした動きが始まると思いますし、もはや園だけで個別のニーズに対応するのは困難だと考えています。園が外に開き、地域のさまざまな人たちと連携していくためにも、保育を言語化する力はますます重要になると思います。



## 橋本先生監修 ● ケーススタディ

## 事例1 ● 子どもの様子に不安を感じている保護者

園での友だち関係や園生活に不安を募らせ、  
アンケートを通じて要望を伝えてきた保護者Aさん

1 Aさんは子どもを愛情いっぱいに一生懸命育てていますが、小さなことも気にかかる様子がうかがえる30代の保護者です。ある日、Aさんが参加した保育参観後のアンケートに「遊びの中での友だち関係をもっと注意深く見て保育をしていただけませんか」という要望が書かれていました。確かに娘のTちゃん（4歳女児）は、最近、一緒に遊んでいる友だち関係が少し流動的になっていると感じていたため、担任も様子を見ている段階でした。しかし、ふだんのAさんの様子から園やTちゃんに対してこのような思いをもっているとはとらえていなかったため、担任は少しショックを受けました。



2 数日後、お迎えのときに担任がAさんに声をかけてアンケートに書かれていた内容について聞いてみました。すると、園では見られないTちゃんの様子がAさんから語られたのです。「園は楽しくなかった」「○○ちゃんから遊ばないって言われた」などとTちゃんから聞いているとAさん。さらに保育参観で、Tちゃんがひとりで遊んでいる様子を見て、「友だちに仲間はずれにされているのではないか」「担任は子ども一人ひとりを見ていないのでは」と不信感を抱いたと話しました。

## 橋本先生の解説

ともに育てる仲間であることを  
言葉で伝える

素早く対応するために、お迎えのときに声をかけるのはよいですね。加えて、保護者の気持ちを受け止めるために、別の機会にゆっくりお話しする時間をとってよいでしょう。改まって場を設けることで「向き合ってくれている」と安心感をもってもらえます。サインを出している保護者には、「受け止めていますよ」ということを伝える環境を設定することが大切だと思います。

そのうえで、気持ちに共感するだけで終わらずに、保護者と一緒にTちゃんをどう支えるか、「今の状況はTちゃんの成長のプロセスだから、Tちゃんのために最大限に生かしたいですね」と保護者とTちゃんを見守る仲間であることを言葉にして伝えるとよいでしょう。

気になったのはTちゃんが園ではそうした気持ちを一切言わずに、家庭で吐露した点です。もしかするとクラスの雰囲気 genuinely Tちゃんにとって居心地の悪いものになっているかもしれませんし、母親に何かをアピールしたかったのかもしれません。家族の関係性を含めてTちゃんの状態を理解し、必要な支援を考えることが大切だと思います。

## 事例2 ● 祖母にお任せで園や担任と関係性が築けていない保護者

園や育児に無関心だったが、子ども同士のトラブルを契機に  
園への不信感を募らせていった保護者Bさん

1 Mちゃん（4歳女児）はふだんのお迎えは祖母が来ているため、保護者のBさんが園に来ることはなく、行事などで会ったときも、園の取り組みに関心をもっているようには思えませんでした。ある日、連絡帳を通じて、前日のプールの着替えのときにMちゃんがある女の子から体に関することやいやなことを言われたと書かれていました。その日の夕方、担任はお迎えに来た祖母に事情を聞いたうえで謝罪しました。



2 祖母が「大丈夫ですよ」と答えたこともあり、担任は特に園長に報告はしませんでした。ところが2日後、保護者のBさんから強い怒りの電話がありました。「Mは大変傷ついている。園長は知っているのか？ 相手の親とも話をしたい」と感情的です。園長は知らなかった情報だったので、まずそのことを謝罪しました。

## 橋本先生の解説

気になる家庭には  
園全体で対応する

このケースも園が一生懸命に対応されたことは十分によくわかります。ただ、ふだんから保育者として何か気になる家庭や特別な配慮を必要とする家庭については、担任だけで抱え込まずに、園長先生などにできるだけ早めに報告し、組織で対応するということを保育者の共通理解として確認しておきたいものです。

また、園に関わっているのは祖母ですが、子育ての主導権はどちらにあるのかということに注意深く見る必要があります。それが母親なのであれば、ご本人に直接電話して説明することが必要だったかもしれません。また、祖母と母親との間にコミュニケーションが円滑に行われていない可能性があり、この他にも気になることが生じるようであれば、園だけでなく、子育て支援センターや家庭児童相談室、保健師さん、また進学先の小学校の先生にも引き継ぎながら複数の目で見守ることが大切だと思います。



# ワークショップ型の園内研修で 同僚性を育む

「いつもの会議」から一歩抜け出し、「気軽にまじめな話をする場」を設けることで、  
同僚の先生たちが「多彩な同志」であることを認め合い、支え合うような関係をつくっていきませんか。  
同僚性を育む研修法をご紹介します。

## こんな園にお勧め！

- ☐ 保育者同士のコミュニケーションを活発にしたい
- ☐ 目的や目標、ビジョンをしっかり共有したい
- ☐ 保育者の仕事に誇りをもって、いきいき働いてほしい
- ☐ 自ら考え、行動するチームをつくりたい
- ☐ 楽しく協力しながら保育をつくっていく園にしたい



## 編集部より 保育者としての原点を語り合い、チームの一体感を高める

前号の2014年夏号第2特集では、「先生同士の同僚性」を取り上げました。記事の中で、広島大学の中坪史典先生は、ふだんの業務で忙しいからこそ、「育ち合える人間関係をつくるためには、一人ひとりの自己開示が大切」と提案されています。しかし、同僚の先生がたと、保育への思いを十分に語ったり、課題に感じていることを率直に語る機会は限られているのではないのでしょうか。日々の保育に忙しくても、それが自分が大切にしたい原点や子どもの身につけたい力につながるならば、それが無駄に忙しいとは思わないでしょう。しかし、そうした自分の思いや保育の意義を確認する機会がないために、日々、多忙感だけが募っている先生もいるのではないのでしょうか。

また、小誌での取材を通して、保育者同士の一体感が以前よりも感じられないことを、課題に挙げる先生が少なくありませんでした。組織の風土改革を専門とし、ベネッセ教育総合研究所が小中高の学校の先生を対象に行ったワークショップ「Teachers' cafe」(\*1)の企画・運営に携わっている株式会社もくてきの與良昌浩氏によると、チームとしての人間関係は、右図のような5段階のレベルで示されると言います。強い集団は共通の目的

をもっています。それが同僚性やチームワークを生み、悩みを相談したり、助け合ったりする風土をつくっていくのではないのでしょうか。

今回、與良氏の協力を得て、園内でできるワークショップ型の研修法を考えました。この方法は、3人以上集まれば行えます。最初は同じ課題意識をもっている仲間と始めて、その効果を感じたら仲間を増やし、徐々に園内に広げてみてはいかがでしょうか。研修は2回分で設定していますが、園の状況に応じて、1回目のみ行ったり、メンバーを変えて2～3回行ったりしても、職場の雰囲気によりよく変わっていくでしょう。

### 先生がたとの関係は 次のどのレベルにありますか。

- レベル1 顔を知っている
- レベル2 気軽に会話できる
- レベル3 真剣に悩みを話せる
- レベル4 共通の目的をもっている
- レベル5 共通の目的に向かって相互支援している

## ワークショップ型園内研修の方法

### 1回目 関係性を深める ▶時間のめやす 60分

・今回の例では、4人参加で60分に収まるように設定しました。時間はめやすとして、参加人数や使える時間に応じて調整してください。

◎保育者として日々どんな課題を感じているのか。1回目は、各人の思いや考えを存分に発散させ、互いのことを深く知り合います。安心して話すことのできる関係性をつくることで、2回目の議論や普段の会議が活性化していきます。

- ・3～4人ずつのグループをつくります。少人数の方が、一人ひとりが話す時間を多く確保でき、自分の思いをしっかりと語れます。議論ではなく、「対話」を心がけます。
- ・ファシリテーター（進行役）を決めましょう。全員が思いを発散させるためにも、進行の管理は重要です。
- ・用意するもの…タイマー、メモ用紙を2枚×人数分

### 1 目的の共有、ルールの確認 5分

◎今回のワークショップの目的を共有します。

例：「応援し合えるヨコの関係をつくるために、まず自分自身のことや今思っていることを語り合ってみましょう」

◎話し合いのルール「ワークショップで大切にしたいこと」(右図)を確認します。

#### ファシリテーターのポイント

- ・「ワークショップで大切なこと」をしっかりと伝えましょう。安心して話せる場ができれば、ふだんは話さないことも話しやすくなります。

### 2 自分を語る 1人8分×人数

◎自分が思っていることを好きなように語ります。とにかく思いつくままに話し出すことで、自分の考えや思いが整理されていくこともあります。

◎8分間は、話す人が主人公になる時間です。語り終えたら、聴いている人は質問をしたり、感想を伝えたりしましょう。

ジブンガタリ(\*2) > どうして保育者になったの？ 保育者になってうれしかったこと、失敗は？

モヤモヤガタリ > 保育をする中で感じるモヤモヤ(違和感・疑問)は？

ミライガタリ > 子どもたちにどうなってほしい？ どんな保育者になりたい？

#### ファシリテーターのポイント

- ・時間が来たら話を終え、全員で拍手をするように促します。
- ・モヤモヤガタリは、解決しようとせず、共有することを目的にします。

### 3 気づいたことのシェア 1人2分×人数

◎各人の話を聴いて、自分が気づいたこと、学んだことをグループ内で発表し合います。ほかの人の気づきを聴くことで、視野が広がりますし、自分の学びの確認にもなります。

### 4 今日の気づきを書き留める 5分

◎今回のワークショップで自分が気づいたことや学んだことを、メモ用紙に書き留めます。きちんと文字にしてアウトプットすることで、更に気づきが促されます。

### 5 次回、話し合いたいテーマを挙げる 10分

◎次回、みんなと話し合いたいテーマを、一人ひとりメモ用紙に書きます。参加者全員で見せ合しましょう。参加人数が多い場合は、テーマが近い者同士、3～4人のグループをつくり、次回はそのメンバーでグループワークを行います(話し合うテーマ例はP.22参照)。

お疲れ様でした！

## ワークショップで大切にしたいこと

- 1 自分の感じていることを素直に話す  
人が感じていることに  
よい・悪いや正解はない！
- 2 相手の話を真剣に聴く  
好奇心の矢印を相手に向けよう！
- 3 評価・否定・批判はしない  
合いの手、うなずき、笑顔、大歓迎！
- 4 同じ目線で一緒に悩み、考える！
- 5 ここでの話を他人に言ったり、  
偏見をもったりしない！

思うままにジブンガタリを  
することがポイント！



3～4人で車座になれば  
フランクな雰囲気に

## 時間が長めに取れるなら

◎参加人数が多く、ワークショップの時間を90分、120分と確保できたら、「ジブンガタリ」「モヤモヤガタリ」「ミライガタリ」を、グループを替えながら行ってもよいでしょう。より多くの人の思いを共有できますし、1人5分ずつでもテーマごとに話すことによって、思いを深められます。

例：「ジブンガタリ」(5分) → グループ替え → 「モヤモヤガタリ」(5分) → グループ替え → 「ミライガタリ」(5分)

\*1 Teachers' cafe 当日の様子については、Teachers' cafe ウェブサイトをご覧ください。http://berd.benesse.jp/tcafe/

\*2 「ジブンガタリ」は、(株)スコラ・コンサルトの登録商標です。



## 2回目 課題解決への意欲を高める ▶時間のめやす 60分

◎2回目は、1回目で見いだしたテーマについて議論します。テーマに対する一人ひとりの思いを発散させ、みんなの思いを束ねていくことで、目的を共有し、課題解決への意欲を高めていきます。

- ・1回目の最後に、話し合いたいテーマをつかったグループで集まります。
- ・ファシリテーター（進行役）を決めます。発言していない人がいたら、話すように促す配慮が必要です。
- ・用意するもの…タイマー、模造紙（またはホワイトボード）×グループ分、メモ用紙×人数分

### 1 目的の共有、ルールの確認 5分

- ◎今回のワークショップの目的を説明します。  
例：「今回は、前回出てきたテーマについて議論を深め、これからしたいことについて目線を合わせたいと思います」
- ◎「ワークショップで大切にしたいこと」（P. 21 参照）を伝えます。

#### ファシリテーターのポイント

- ・「ワークショップで大切にしたいこと」は1回目と同じです。同じことだからと省略せずに、再度伝え、話しやすい雰囲気をつくるのが重要です。

### 2 テーマについて現状を共有する 発散 15分

- ◎各人がテーマについて思っていることを自由に話しましょう。それぞれの思いなので、ばらばらでも構いません。模造紙などに書いていきます。
- ◎要望や期待、不満なども出てきますが、現状を共有することが目的です。事実と意見をわけ、また、他の人の発言を否定しないようにしましょう。

#### ファシリテーターのポイント

- ・発言していない人がいたら、話すよう促してみましょう。ただ、発言したくない場合は、パスも認めましょう。
- ・最初に各人が付せん考えを書き、貼っていく方法でもよいでしょう。

### 3 テーマについて、ありたい姿を話し合う 15分

- ◎現状を共有した後は、テーマについて、どうあったらよいのか考えを出し合います。理想でも、期待でも、実現が難しそうなことでも、思っていることは発言してみましょう。

### 4 話し合ったポイントを言葉にまとめる 10分

- ◎ありたい姿に近づくために重要だと思ふポイントをまとめます。絞り切れなければ、仮で決めても構いません。テーマに対してなるべく端的に言い表せるように、グループでまとめていきます。

### 5 全体で話し合ったことを共有する 発散 10分

- ◎グループが複数ある場合は、各グループで話し合った内容を全体で発表し、共有します。模造紙などを見せながら発表するとよいでしょう。

### 6 これからやってみたいことを書く 5分

- ◎今回のワークショップで自分が学んだこと、テーマについて今後、自分でやってみたいことを文字で書き留めます。今回のワークショップで得たもの、思いを大切にしましょう。

お疲れ様でした！

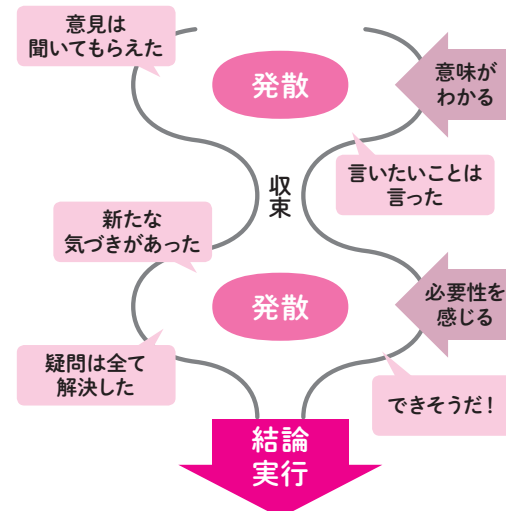
#### 話し合うテーマ例

- ◎遊びの環境構成
- ◎保護者との関係のあり方
- ◎子どもに身につけてほしい力

考えは模造紙に  
どんどん書き留めます



各人の思いを発散することが  
実行へのエネルギーとなる！



#### プロのファシリテーターが語る

## 楽しく、まじめに対話する場を通して 課題解決や未来創造に自ら動き出せるように

株式会社もくてき代表取締役、  
株式会社スコラ・コンサルト プロセスデザイナー 與良昌浩



よら・まさひろ

大手商社、大手コンサルティング会社などを  
経て、現職。

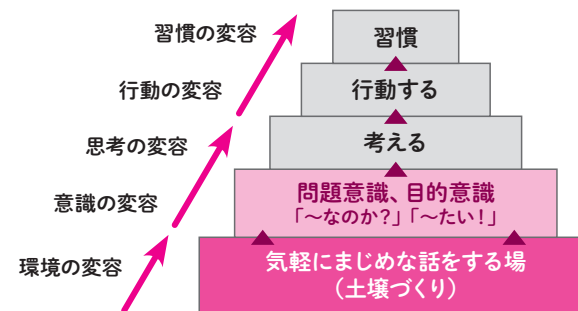
#### 課題がありつつも一歩踏み出すことで変化が生まれる

私は、組織の風土改革を支援する仕事をしています。これまでいくつもの園や学校を訪れ、先生がたの研修や生徒たちのワークショップに携わってきました。そこで感じたのは、園や学校の組織も、職場として抱えている課題は企業と同じということです。ただ、先生がたは、職業としてこうあるべきという社会的な期待も大きく、また先生自身の理想も高いため、なかなか本音を話づらいという環境があるのではないのでしょうか。

2013年度行った Teachers' cafe では、「意識の高い先生が集まり、校種や立場が関係のない特別な環境だから、参加者は自由に話せる」という声が聞かれました。確かにその通りです。同じ手法を自分の園や学校で行うことは難しいと思うのは当然です。しかし、実際には、隣の人でも自分のことを語り合う機会は少なく、このようなワークショップを通して初めて「そんなことを考えていたんだ」と驚かれる場面を数多く見てきました。

うまくいかないかもしれない。でも、そうした課題意識

#### 問題意識や目的意識は進化のエンジン！



話し合いによって、問題意識や目的意識が動き出すと、必要な情報や経験がまわりつくようになり、その意味や価値も変わっていく。課題について考えるようになり、次第に行動の変化にも結びつく。

をもちつつも、まずは実践してみるものが大切だと考えています。失敗したら次の方法を考える、うまくいったら繰り返しやってみる。何かをやり、積み重ねることで、園や学校という組織も確実に変化していきます。

1回目のワークショップでは、同僚性を育むことに注力し、安心して話せる環境をつくる工夫をしています。最初に行う「ジブンガタリ」では自分のことを話すので、聞き手は批判のしようがありません。そうすることで、「自分を受け入れてくれる」という感覚をつくっているのです。更に、思いや悩みを共有することで、人は心の距離が縮まります。そうして人のつながりの質を変えていくのです。

#### 結論に納得して力を尽くすための対話

2回目のワークショップは、課題認識とありたい姿を共有することに注力しています。解決策はその糸口が見つかればよい、くらいの気持ちで話し合うのがポイントです。なぜならば、一度思いを発散させておくことで、決定事項に対して、たとえ自分の考えが反映されていなくても納得し、その実行に力を尽くせるからです（P.22 右下図）。一見、生産性のないワークショップでも、一人ひとりの意欲を高めるためには効果的なのです。

発散の過程では、混沌や混乱が見られるかもしれません。それは、収束への過程のひとつとして必要ととらえてください。「言いたいことを言い、疑問を解消し、新たな気づきを得て、結果的に課題解決へと自ら動き出す」そうしたワークショップの目的を、最初に説明するとよいでしょう。

ワークショップ型の学びは、大学の授業や企業の研修で盛んに取り入れられており、子どもたちが今後経験していく学びの形態のひとつです。先生としてそうした新しい学びを体験するという意味でも、このワークショップ型の研修をぜひ取り入れてみてください。

## 実践レポートをお寄せください！ 応募者から抽選で100名様に書籍をプレゼント

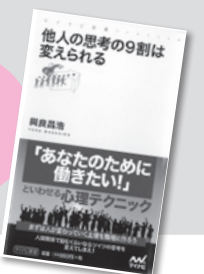
園内でワークショップ形式の研修をどのように行ったのか、ご報告をお待ちしております。ご報告をいただいた方の中から抽選で100名様に、Teachers' cafe の監修をする與良昌浩氏の最新著書『他人の思考の9割は変えられる』（マイナビ新書）をプレゼントいたします。ご応募は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトからお願いします。

<http://berd.benesse.jp/tcafe/>

Teachers' cafe ベネッセ で 検索

締め切り  
2015年1月9日(金)着

より詳しい  
考え方や  
手法が満載！



\*『これからの幼児教育』VIEW21 小学版・中学版へのご応募から抽選で100名様にプレゼントいたします。  
\*当選者の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます（お届けは2015年2月上旬を予定）。  
\*商品のお届けは、応募された方の勤務園宛となります。ご自宅への発送はいたしかねますのでご了承ください。



# Reader's Voice

2014年夏号・第1特集「幼児教育に求められる『遊びの質』とは何か」、  
第2特集「先生同士の『同僚性』を高める」へのご意見

このコーナーでは、編集部へ寄せられた読者の先生がたからのご意見をご紹介します。

※『これからの幼児教育』のバックナンバーは、「ベネッセ教育総合研究所」のウェブサイト (<http://berd.benesse.jp/>) でご覧いただけます。

◎第1特集を読んで、子どもにとっては、どんなことも「遊び」感覚になり得るのだとわかりました。「自発性」「自己完結性」「自己報酬性」の3つの要素は、なるほどと思いました。大人にとってもそう言えますね！「学び」を見直すきっかけになりました。

(愛知県・私立幼稚園)

◎河邊先生のお話はとてもわかりやすく、遊びは「混沌」の中に『秩序』を見いだす営みであり、学びそのもの」というところが特に印象に残りました。

(東京都・公立幼稚園)

◎遊びを中心にした保育が定着しない理由として「放任」になってしまうこと、「休み時間」のようになってしまふことが指摘されていましたが、思い当たることがあり、ドキッとしました。幼児期の遊びが重要であることをしっかり認識して、保育者が子どもの遊びを適切に援助できるようなスキルを身につけられたらと思います。

(熊本県・私立保育園)

◎保護者に「遊びの重要性」を理解してもらいたいと思い、資料を作っていたときに第1特集を読みました。「遊びの質」に関する説明は非常にわかりやすく、資料作りにとても役立ちました。遊びを中心とした保育が

定着しにくい理由は、自分自身にも漠然とした理解しかありませんでしたが、保護者に明確な形で説明できそうです。

(福岡県・私立保育園)

◎第2特集では、「雑談を通して」保育者同士が理解し合い、その結果、子どもの理解も進むという考えに共感しました。私も園長として、「絶対に保育者を孤立させない」「全園児を全職員が知る」を念頭に置いて、日々保育を行っています。

(岩手県・公立保育園)

◎保育者全員が同じ方向を向いて子どもたちの保育にあたっているつもりですが、つつい一人ひとりの保育者の「できていないところ」に目が行きがちです。「子どもの主体性を伸ばしていく保育を目指す」のであれば、まず園長が「保育者の主体性を尊重すること」が必要でしょう。私も原点に帰らなければ強く思います。

(東京都・認定こども園)

◎当園も、ベテランと若手がキャリアに左右されず、自由に思いを述べられるよう試行錯誤してきました。園だより、学年だより、行事など、それぞれに担当者を決め、責任をもって運営していくようにすると、若手でもチームリーダーになることができ、園全体が活性化しています。

(富山県・認定こども園)

## 子どもは未来

ベネッセ教育総合研究所は、  
子どもたちの成長に寄り添う研究と  
社会への発信を通して、  
一人ひとりが学びに向かい、  
今と未来を“よく生きる”ことに  
貢献することを目指しています。

ベネッセ教育総合研究所

### 編集後記

ある先生の保育を見学したときのこと。遊びが停滞していたところにその先生がひと言声をかけたところ、子どもたちの表情や行動、その場の雰囲気ガラリと変わりました。自分たちの気持ちを理解してもらえて、子どもたちもうれしい気持ちになったのだらうと感じたと同時に、援助の背景にあった深い子ども理解に心打たれました。(橋村)

『これからの幼児教育』2014年秋号

2014年10月8日発行

発行人 谷山和成  
編集人 小泉和義  
発行所 (株)ベネッセホールディングス  
ベネッセ教育総合研究所  
凸版印刷(株)

印刷製本 有)ペンダコ  
編集協力 二宮良太  
執筆協力 ヤマガチイッキ、荒川潤、谷口哲  
イラスト協力 アサナマリカ

### お問い合わせ先

◎情報編集室  
〒206-0033 東京都多摩市落合1-34  
電話:042-311-3390  
※本誌は最新号・バックナンバー等の追加発送は行っていません。すべての記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトからPDFでご覧いただけます。ぜひご利用ください。  
<http://berd.benesse.jp/>

# ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトには 調査データや最新の教育・保育情報が満載です!

乳幼児領域から大学領域などの各研究室の研究レポートや、情報編集室発刊の情報誌が、すべてご覧いただけます。  
現在の教育課題に対する提言「ベネッセのオピニオン」、世界の保育や子育てがわかる「チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)」など、ウェブサイトではしか読めないコンテンツも満載です。



乳幼児を取り巻く  
情報の入口

▼ベネッセのオピニオン

子育てや保育の  
データ満載

▼『これからの幼児教育』

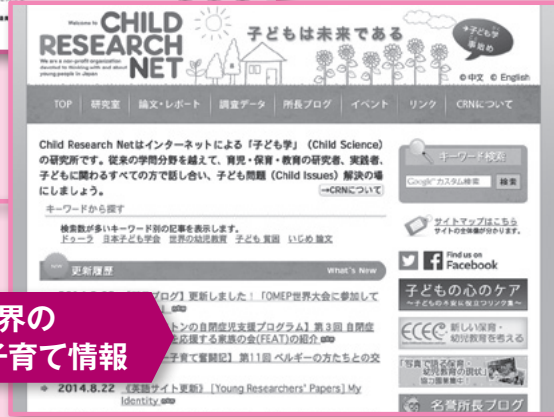
創刊以来の  
バックナンバー掲載

▼『チャイルド・リサーチ・  
ネット (CRN)』

世界の  
保育・子育て情報



教育課題への提言  
(毎月)



※ここでご紹介した内容、デザインなどは変更になる場合があります。

アクセス方法は <http://berd.benesse.jp/> または **ベネッセ 研究** で **検索**